

# トーク & 卓球対決

北川フラム (アートディレクター／本展ディレクター)

浅葉克己 (アートディレクター)

[日時] 2019年9月8日(日) 14:00～17:00

[トーク会場] 高島屋史料館 TOKYO 5階旧貴賓室

[卓球対決会場] 高島屋史料館 TOKYO 4階展示室

タイポグラフィの第一人者であり、世界的に活躍するアートディレクター・浅葉克己氏。長年、雑誌で卓球についての連載をもち、「ひとりピンポン外交」として精力的な卓球活動も行う氏が、卓球経験者である北川フラム氏とともに卓球とアートについて語ります。トーク終了後には、『デパート卓球』展会場で、両氏を迎えた卓球大会が開催されました。



北川フラム (きたがわふらむ) /アートディレクター

1946年新潟県生まれ。東京藝術大学美術学部では仏教彫刻史を専攻。大学卒業後、東京藝術大学の学生・卒業生を中心に「ゆりあ・ぺむべる工房」を発足させ、展覧会やコンサート、演劇の企画・制作に関わる。1982年にアートフロントギャラリーを設立し、2000年より開催されている「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」では総合ディレクターを務める他、瀬戸内国際芸術祭でも総合ディレクターを務めている。2016年紫綬褒章、2018年文化功労者。主な著書に、『美術は地域をひらく 大地の芸術祭 10の思想』(現代企画室、2014年/アメリカ、台湾、中国、韓国で翻訳出版)、『ひらく美術 地域と人間のつながりを取り戻す』(ちくま新書、2015年)などがある。



浅葉克己 (あさばかつみ) /アートディレクター

1940年神奈川県生まれ。1958年神奈川県立神奈川工業高等学校図案科卒業。同年、百貨店松喜屋宣伝部に入社。1959年桑沢デザイン研究所リビングデザイン基礎コースで学ぶ。1964年ライトパブリシティに入社。1975年浅葉克己デザイン室設立。2011年桑沢デザイン研究所第10代所長就任。アートディレクターとして、西武百貨店「おいしい生活」、サントリー「夢街道」など、数多くの作品を制作。2002年紫綬褒章、2013年旭日小綬章など受賞歴多数。

## 地球文字の探検家・浅葉克己

**浅葉** | 「デパート卓球」、やっと実現しましたね。百貨店で卓球をするなんてことは普通考えられないことです。私は18歳のときに横浜の松喜屋百貨店の宣伝部に入社したのですが、その会社には卓球部はありませんでした。

私はこれまで、「ひとりピンポン外交」という活動を続けてきました。ピンポン外交という言葉が死語になっていないと良いのですが。今日は私の原点とも言える好きな言葉をご紹介します。卓球に関するこれまでの取り組みについてお話しします。

「探検隊員を求む。至難の旅。わずかな報酬。暗黒の長い月日。絶えざる危険。生還の保証なし。成功の暁には名誉と賞賛を得る」——これは、1914（大正3）年にイギリスの探検家アーネスト・シャクルトンが南極探検隊員を募集した、ロンドン・タイムズの小さな広告の一文です。「わずかな報酬」というのがグッとくる、非常に心動かされるリクルート広告です。20人の隊員の募集に5000人もの応募があったそうです。この言葉は私の座右の銘でもあって、仕事の話が来たときは、この言葉を見て、「よし、やってやろうじゃないか」と自分を奮い立たせています。

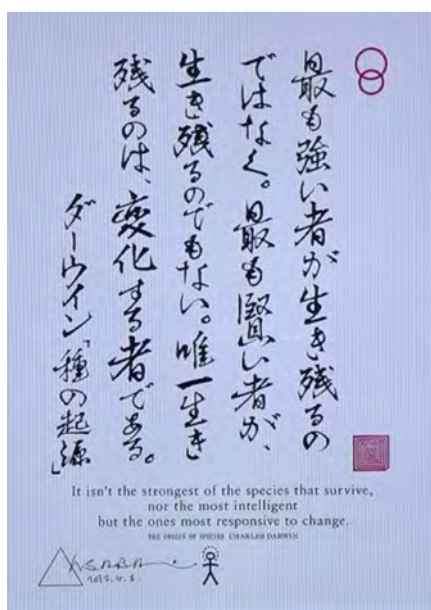
それから、私は「地球文字探検家」として地球上のおもしろい文字を追い求めています。世界の三大文字は漢字・ラテン文字・アラビア文字です。しかし、地球上には使われている文字だけでも50以上あり、いまでも生きる唯一の象形文字であるトンパ文字や、11種類もあるインド文字など不思議で魅力的な文字がたくさんあります。インドでは英語とヒンディー語以外に十数種類もの言語が使われていて、インドのお札には17種類の文字が記されています。マイナーな文字の新聞がほしくなり、先日、アートディレクターの仲條正義さんがインドに行くので買って来てとお願いしたのですが、買ってきてくれたのは全然違う新聞で、「そんなに細かい文字のことはわからないよ」と言われてしまいました。

冒険家の植村直己さん、堀江謙一さんが北極点を目指した1978（昭和53）年には、クリエイターも頭を冷やそうということで「北極圏人会」をつくり、北極の探検に行きました。作曲家の三枝成彰さんやデザイナーの内田繁さんなどが参加する総勢40名の団体です。夏には毎晩バーで酒を酌み交わし、北極で何をしようかと話し合ったのですが、北極へ行くのは極寒の2月。皆「痔が悪い」など言い出したので、結局、コピーライターの糸井重里さんと写真家の富永民生さんの3人で北極を目指し、北緯74度のレゾリュートという最北の街まで行きました。極地パイロットたちが泊まるブラッドベリー・エアサービスというホテルに泊まったところ、ロビーに卓球台がありました。エスキモーはあまり卓球をしません。北極は卓球発祥の地であるイギリスの領地なので、パイロットたちは皆卓球をするのです。そこで北極圏卓球選手権大会を思いつき、その場にいるパイロットや冒険家など総勢30人で大会を開催し、私はそこで北極圏チャンピオンに輝きました。



浅葉克己『地球文字探検家』二玄社、2004年：「鼻から火を吹いているのは、冒険というのはなかなかスポンサーが見つからないので、それぐらい勢いでやらないと、ということです。」(浅葉氏)

**浅葉** | 「最も強い者が生き残るのではなく。最も賢い者が生き残るのでもない。唯一生き残るのは、変化する者である」。これは、ダーウィンの「種の起源」の言葉です。糸井重里さんが東北の震災のあと被災地に行くと、この言葉が貼ってあったそうです。私達デザイナーも毎日変化する職業ですから、生き残っていききたいなと思っています。



ダーウィン「種の起源」(浅葉氏筆)

**浅葉** | 私の好きな言葉は「好奇心」です。好奇心がないと何もできません。ぱっと見て、おもしろいと思ったらそこに飛び込むといいと思うのです。あわせて、「実験精神」も常にもっていないといけません。

また、最近気になっている言葉は「羅針盤」です。羅針盤は航路を指し示すもので、火薬・活版印刷と並ぶ三大発明のひとつです。パウル・クレーが描いた羅針盤を見ると、石、木、色彩、織物、粘土といった素材が書いてあって、想像力を刺激します。私も羅針盤をつくってみたいですね。それに、いま、日本には羅針盤となるものがないから、皆方向がわからなくてうろうろしているのではないのでしょうか。日本の航路を指すものがあるといいなと思うのですが。





ときは、当時小学3年生の福原愛ちゃんと一緒に撮影をしました。いまでは結婚してお子さんがふたりもいますから、感慨深いですね。この撮影で使った小さな卓球台はいまでもあります。かなり小さなサイズですが、意外に打てるものですよ。

全面凍結した北海道網走湖で卓球をしたこともあります。TV番組のために映像を撮影しに行きました。対戦相手は元駒沢大学卓球部の主将で、いまは北海道で住職をしている卓球和尚・佐伯至純さんです。重さ27kgの折り畳み卓球台をふたりで担いで行きました。コートを脱いで打とうかと言ったものの、吹雪になってしまい、寒さに耐えかねてコートを着たまま打ちました。

北川さんとの最初の仕事は2003（平成15）年の「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」です。私はグラフィック全般のアートディレクションを担当したほか、オランダの建築家ジョン・クルメリングと組んで松之山温泉の高さ20mの巨大看板をつくりました。これはいまでも立っています。



1. 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2009 ポスターロゴ  
 2. ジョン・クルメリング（テキストデザイン浅葉克己）「ステップ イン ブラン」2003年 [撮影：NAKAMURA Osamu]  
 すべて [提供：大地の芸術祭実行委員会]

**浅葉** | デザイナー歴も60年になりました。そろそろアーカイブをしないとイケないなと思い、2015（平成27）年に「浅葉克己ポスターアーカイブ展」を開催しました。

いろいろポスターをつくってきたなかで、世界卓球選手権のポスターは2回やらせてもらいました。2001（平成13）年の大阪大会のポスターは、風神雷神が卓球をしている絵です。この風神雷神は、よく見るとロボットとして描かれています。イラストレーターの奥村鞆正さんに描いてもらいました。その前の1991（平成3）年に千葉で行われた大会のポスターの絵は、中村貞以という画家による、卓球を描いた日本画「待つ宵」、1933年」です。両手がなく、口で絵を描く方です。この絵は、長野県の佐久美術館に所蔵されています。佐久美術館では日本画の展覧会をやると、まずこの絵が展示されます。とても巨大な絵です。



**浅葉** | 2015（平成27）年には北川フラムさんから話をいただいて、「巨匠シリーズの個展」でアーティストの磯辺行久さんと建築家の原広司さんという大巨匠に続く3人目として、浅葉克己展をやらせてもらいました。自分のことはいつも新人と思っているのですが、もう79歳になりました。この展覧会の軸は「デザイン・文字・卓球」。会場にも来場者が自由に打てる卓球台を置きました。

**北川** | 来年は石の卓球台をどこかに持っていけないかと考えています。瀬戸内か珠洲かで常設にしたいですね。つくる前は、石では球が弾まないのではと思ったのですが、ふつうの木製の台と同じくらい弾みます。

**浅葉** | そうですね。打ったボールはナックル（無回転）系になりますけれど。3台のうち1台は大田区の新田神社に置いてあります。子どもたちが卓球をしに来てくれて、たまに選手権も開催されています。神主さんには、ぜひ挑戦しに来てくれと言われていました。

2020（令和2）年には第2回目となる「奥能登国際芸術祭」があります（\*新型コロナウイルス流行により2021年へ延期された）。これもポスターやロゴのデザインを担当しています。「最涯の芸術祭、美術の最先端。」というキャッチコピーがいいでしょう。奥能登はすばらしいところですね。

**北川** | 能登半島の北端に位置する石川県珠洲市は、人口1万4000人の小さな街です。江戸時代には北前船が来ていたことから、日本中からものや文化が集まる最先端の地でした。いまでも難解な地名や多くの寺社仏閣が残ります。また、アジアまで含めて日本地図をみたときには中心になり、日本への入り口となる場所でもあります。可能性がある場所だと思い、力を入れて取り組んでいます。

おもしろいのは、定期船の待合所を改装した「さいはての『キャバレー準備中』」です。最果てに、文化が集まる社交場のキャバレーがあるというのがいい。市営なので資金は潤沢でないのですが、いろいろな催しをやっていて、結構流行っています。地域の人たちにも受け入れられていて、地元の高校生たちが受験勉強をしていたり、市長がしょっちゅう行っているのも地元の新聞に載っていて、まちの公認になっています。

また、「ヨバレ」という昔からの独自の風習が残っている土地でもあります。芸術祭の期間に行われる「キリコ祭り」は江戸時代から続くもので、各家庭が人

を招きごちそうをふるまうというものです。全く知らない家に行っても歓迎され、御膳料理を出してもらえます。市長のような訪問先が多い人は少しずつしか食べられないのですが、食べ残したものは片付けて、次にくるひとのために新しいお膳を出す。これはすごく贅沢なことです。祭りだからということで、あらゆることが許される。そういうプリミティブな魅力が残るまちなのです。

**浅葉** | 芸術祭のポスターの写真は、写真家の石川直樹さんが撮ってくれました。彼は民俗学に関心があって、はずれのお祭りやお面が大好きな方で、冒険カメラマンでもあります。

**北川** | このあいだも「K2に行こうと思っている」と仰っていましたね。K2というのは、世界で2番目に高い山です。

**浅葉** | ポスターの写真で奥に見えるのが軍艦島と呼ばれる見附島です。

**北川** | 見附島は、この20、30年以内に一度行っておかないとなくなる可能性があります。風雨に削られて、昔の写真と比べると大分細くなっています。

**浅葉** | この島が見える海岸に、割れた瀬戸物を漂流物のように並べた作品もありましたね [リュウ・ジャンファ「漂移する風景」、2017年]。

**北川** | 中世に中国の景德鎮から焼き物が伝わってできた珠洲焼は、日本で最初の窯かもしれないと言われています。釉薬を使わない黒灰色が美しい焼き物です。日本の広範囲に広まったものの、戦国時代になると忽然と姿を消しました。そういう意味でも、不思議なまちですね。いまはこれを現代の技術も取り入れながら復興していて、お土産としても人気があり、9月には渋谷ヒカリエでも珠洲焼の展覧会を行います。

**浅葉** | 市内には江戸時代を思わせる町並みが残り、昭和初期からありそうな看板があったりします。そういったまちに最先端のアートがあるというのがおもしろいですよね。芸術祭では、まちに残る銭湯や遊郭だった建物を使った展示も行っています。



奥能登国際芸術祭 2020 ポスター  
[提供: 奥能登国際芸術祭実行委員会]



**浅葉** | 香港の有名デザイナーのトミー・リー（李永詮）が大展覧会を開いたときには、オープニングで卓球の試合の挑戦をうけました。会場に行くと卓球台から審判員、解説者、ボールボーイまで用意してあって、観衆も1000人くらいいました。彼は香港出身ですから、やはり小さいころに卓球をやっていたそうです。結果は、11-3で私が勝ちました。たとえ点数に開きがあっても、きちんと試合らしい試合になるのが卓球の不思議なところで、いいところでもあります。



トミー・リーの個展での試合（2018年）

**浅葉** | 2018年には、ニュージーランドのアーティスト、ディーン・プール氏が新しい卓球台をつくってしまいました。卓球台に穴が空いていて、そこから球がぼんと上がってくるというものです。あまりおもしろくないのだけれど（笑）。彼は「毎日練習して、10年後には浅葉に勝つ」と言っていました。でも、10年後では、こっちは死んでしまうよ（笑）。台は、AGI（国際グラフィック連盟）のデザイン会議の会場となったギャラリーで展示しました。

今年は、「ユーモアてん。／SENSE OF HUMOR」（21\_21 DESIGN SIGHT、2019年）という展覧会のディレクションをしました。ユーモアというのはむずかしいですよ。でも、5万人が来場してくれて、フラムさんも見に来てくれました。

私が『卓球王国』（卓球王国）という雑誌で17年続けている連載「浅葉克己のひとりピンポン外交」はいま第193回を迎えたのですが、その一部を展示しました。他に展示された作品には、小学生がつくってくれた「パンツをはいたラケット」や、メキシコに行ったときにサボテンがラケットみたいに見えて、そこから得たアイデアをもとにつくってもらった「卓球ラケットスタンド」などがあります。ラケットスタンドは卓球用品メーカーのタマスで製品化するかもしれません。卓球用品店に行くと、ふつう、ラケットは箱に入れられて伏せて積んであるので、手に入るまでは中身が見えないのです。このラケットスタンドなら、どのラケットがいいかを手早く選べていいですね。また、21\_21の真ん中には中庭があります。そこにつくったのが「笑える石庭」です。一本棒を立てることで、こんな石庭はないよなあとちょっと笑える。そういうのもいいものかなと思ってつくりました。

また、今年は私が所属するクラブチーム・東京 KINGKONG の創立45周年の年でした。6月には第12次海外遠征として北京へ行ってきました。遠征ではこれ



まで韓国やドイツ、ニュージーランドなどにも行きましたが、第1回目も行き先は中国でした。

40年前の第1次遠征では、16人を連れて雲南省の少数民族学園へ行きました。行ってみると学園のグラウンドになぜか人が大勢いて、陸上大会でもあるのかなと思ったら、そこで卓球大会が開催されました。写真は、1000人の観衆の前で私がフォアハンドスマッシュを決めているところです。

私がよく練習をしに行く大学の卓球部でも、1年生がまずするのは、スマッシュの練習です。スマッシュを決めることが一番の原点なのです。



1979年、中国・南寧の少数民族学園での卓球大会

**浅葉** | 北京へ行ったもうひとつの目的は、デザインの展覧会です。北京で活字をつくっている方正字庫社のポスター展に参加しました。この会社はあらゆる文字のフォントをつくっていて、褚遂良（ちょすいりょう）なんかの、書道家の字までつくってしまっているのです。

**北川** | 褚遂良というのは中国の書家で、よく書道のお手本になる人ですね。

**浅葉** | 私は書道も長年続けています。書道では、臨書という、手本を見ながら字を書くことをずっと続けます。私は20年褚遂良の字を写しましたが、まだ満足いきません。書いても書いても終わりがありません。

この方正字庫社の展覧会のお題は、漢字4文字を含むポスター。私は「餓虎投身（がこうしん）」のポスターをつくりました。餓虎投身というのは、澁澤龍彦さんが最後に書いた小説『高丘親王航海記』に出てくる話です。高丘親王が広州から舟にのって天竺に向かうのですが、途中で体力がなくなってしまう。インドやマレー半島では虎が行ったりきたりしているというから、虎に食われて天竺へ渡ったほうが楽なのではないかと、本当に食われてしまうのです。餓虎投身はお釈迦様の言葉ともいわれています。すごくおもしろい話ですから、ぜひ読んでみてください。

**浅葉** | ポスターといえば、今年はバウハウス創立 100 周年のポスターもデザインしました。私が教えている桑沢デザイン研究所はバウハウスをモデルとしてつくられた学校で、最近もドイツと交流して制作を行ったりしています。



餓虎投身ポスター（2019年）[提供：TDC]

**浅葉** | 北京には5日間滞在しましたが、卓球とデザインで忙しい5日間でした。前半は講演会や展覧会、後半は向こうの卓球チームとの試合でした。4人チームでの総当たりの個人戦全16試合で、結果は、我々が5勝11敗で負けました。私は、相手チームの代表選手に6-11、11-9、11-9で競り勝ちました。全体でみれば成績は1勝3敗でしたが、この1勝の意味は大きいですね。

この試合に勝てたのは、出澤杏佳さんという選手に出会えたおかげです。彼女は水戸の大成女子高校の2年生で、関東大会を2連覇して、先日のインターハイでベスト8だった選手で、私が理想としている卓球選手でもあります。彼女のような、フォアとバックでラバーの種類が違い、変化をつけて戦う戦型を研究しているところです。



1. 東京 KINGKONG の遠征メンバー
2. 出澤杏佳選手と浅葉氏

## 卓球というスポーツのポテンシャル ——アートとスポーツをつなげる

**北川** | 浅葉先生は絶頂時どれくらい強かったですか？最高成績は聞いておかないと。

**浅葉** | 高校時代は団体戦でベスト 8 くらいです。団体戦では勢いよく一番手が出るのですが、だいたい負けます。日本を代表する卓球選手である故・荻村伊智朗さんの浅葉克己評は「すごく強いけど、ちょっと弱い」。その「ちょっと弱い」が気にかかるじゃないですか（笑）。それをどうしたらいいかなと思っています。

日本ベテランオープン卓球大会はチームのエース・東海正堯（徐向東）さんと組んで 2 位でした。10 月には全日本クラブ選手権大会があります。東京 KINGKONG は、男子 50 代の部の 5 連覇を狙っています。

**北川** | ですから、浅葉さんは強くてこういうことをやっている。

**浅葉** | ありがとうございます。まあ、たいしたことはないですけどね。

**北川** | 僕も中学のときに卓球を一生懸命やっていました。卓球というのはいろいろな意味でおもしろいスポーツですよ。いまはなくなりましたが、昔は旅館に卓球台がありました。「卓球温泉」（1998 年）という映画もあったくらいです。

そういえば作曲家の一柳慧さんも卓球をされていて、僕は何度も誘われたのですが、全部さぼったために、もうお呼びがかからなくなってしまいました……（笑）。

**浅葉** | 私は一柳さんとは何度か打ちました。一柳さんはペンホルダー（ラケットの持ち方の種類のひとつ）でした。ロビング（ボールを高く打ち上げる打球）をあげてくる方で、お上手でした。

**北川** | 卓球はひとつひとつの動きはハードでないように見えるのですが、バドミントンに似て、ものすごい運動量なのです。僕は中学一年の秋、人に誘われて卓球部に入り、3 年の秋までの 2 年間やりました。このときに一生懸命やっていたというのが、僕の体力や骨格をつくってくれたと思っています。浅葉さんのところへはまだ一度も練習に行けていないのですが。

新潟や市原の芸術祭でも卓球をしましたから、今後もどこかでやりたいなあと思っています。そういうわけで、卓球には強い思い入れがあります。

4 階でやっている『デパート卓球』展のいきさつとして、瀬戸内に女木島での「島の中の小さなお店」プロジェクトがあります。女木島は高松から一番近い島なのですが、人口がぐんぐん減って、150 人をきるところです。人口が 150 人をきると今後のいろいろな展望がなくなるので、なんとか頑張らないといけな。そこで、島の人にとって 1 ヶ月に 1 回必要なこと、そして、他所から来た人にとってもおもしろいことで、ときどき通ってもらえること。そういうことができれば商売がぎりぎり成立するのではないかと考えたのです。それでやっているのがカットハウス、的屋、喫茶店、ランドリーなど。おかげでなんとかうまくやっています。僕はまちづくりにずっと関わってきて、代官山ヒルサイドテラスができてから今年で 50 周年



です。これはよく頑張ってきたと思います。「アーバンヴィレッジ代官山」のような、都市のなかの村は重要だと思っています。そういう規模でやっていければいいなと思って、女木島のプロジェクトにも取り組んでいます。

今日の会場にもいらっしゃっていますが、アーティストの原倫太郎さん、原游さんのお二人に何かやってもらえないかということで話をもちかけました。そこで二人がつくってくれたのが、不思議な卓球台です。今回それを『デパート卓球』展としても展示することになりました。日本橋高島屋さんの旧貴賓室ですから、貴賓室卓球と言ってもいいかもしれません。一方で、まちの再開発で有名な高松市の丸亀町からも声がかかり、いまはそのアーケードで『アーケード卓球』というのをやっている最中です。今後は、瀬戸内に回ってくる「にっぽん丸」という船で『クルーズ卓球』というのもやろうということになっています。それぞれのところで卓球チャンピオンが誕生するわけですね。美術がスポーツとつながる、おもしろい取り組みだと思っています。



トーク終了後、浅葉氏は持参したカラフルなピンポン玉 12 球をラケットで打って観客にプレゼントした



## 「デパート卓球」卓球大会レポート

トーク終了後、4階展示室で卓球大会が開催されました。試合形式は、総勢25名が参加するトーナメント戦。水の流れる卓球台と木琴の卓球台の二手に分かれて試合を行い、それぞれの台で勝ち抜いた2名が、浅葉克己氏との決勝戦を行いました。

一般からの参加者のほかに、北川フラム氏、台を制作した原倫太郎氏・原游氏、浅葉氏率いる東京 KINGKONG の選手陣が参加した本大会。カラフルな会場で本気のラリーが繰り広げられ、白熱した試合に満員の会場は熱気に包まれました。

アート作品である2台の卓球台は、どちらの台も通常の試合ができますが、水や木琴の設えが良い意味で選手を翻弄していたと言えます。

水の台は、ジグザグに切られた溝の中を水が流れていて、川のようになっていました。コートに左右に打っていただければ水の中には落ちないのですが、ラリーが白熱してくると、思いがけないタイミングで落ちてしまいます。一度ボールが水の中に入ってしまうと、たとえ跳ね上がった後も再び打ち返すのは至難の技でした。

木琴の台は、台に敷き詰められた木琴に球が弾むと、台の下に設置されたスピーカーで音が増幅されて、少し重みのある音色が鳴る設計です。展示の会期中、初心者のお客さん同士がゆっくりラリーをしている様子を伺う機会があり、音が鳴っていることでとても楽しげで良い雰囲気でした。試合の際は、木琴の端に球があたると思いがけない弾み方をすることがあり、プレイヤーを困惑させていました。

今回のトーナメント参加者は主に都内在住の卓球経験者の方方で、休みの日に友人と体育館で練習をされているという方から、クラブチームに入って普段から大会に向けて練習しているという方まで様々でした。

今回参加されていた「東京キングコング」は、結成して45年になる浅葉さん率いる卓球のクラブチームで、チーム名は Ping Pong の P を K に変えたところからきているそうです。過去には糸井重里氏やイラストレーターの山口はるみ氏などの文化人が所属していたこともあり、いまでも非常に活気と勢いのあるクラブチームです。

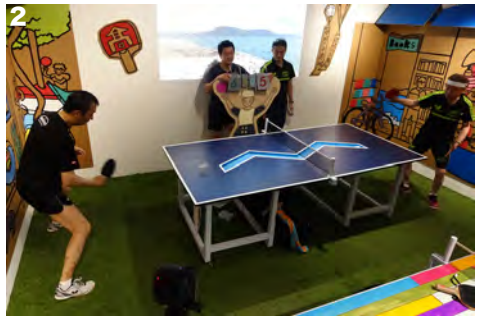
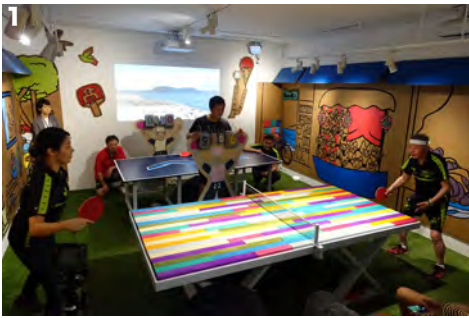
北川氏と浅葉氏は、御二方とも年齢を感じさせないプレーをされており、確かな実力をお持ちのプレイヤーです。

北川氏はパワフルなプレーをされている印象でした。一本一本の打球が鋭く、打ち込まれたら力負けしていたかもしれません。序盤で今回のトーナメント優勝者と対戦をされていましたが、トーナメントの組まれ方によってはより上位に勝ち進む実力をお持ちであると思います。

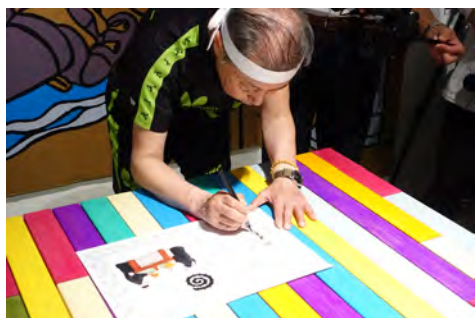
浅葉氏は日頃から練習されているとのことで、やはり非常に安定感がありました。最後、カットマンの選手にも打ち勝っており（カットマンとの試合は、上回転をかけて返球し続ける必要がある）、79歳とは思えない足腰の強さと体力でした。



1. 北川フラム氏と原游氏の試合は、経験者の北川氏が勝利
2. 東京キングコングの選手同士の試合。回転を掛け合うハイレベルなラリーをみせ、会場を沸かせた。テンポのよいラリーで、木琴の台は心地よい音をリズムカルに奏でていた
3. 北川フラム氏対東京キングコング・井ノ口選手。ペンホルダーで鋭い打球を繰り出す北川氏



1. 木琴の台の決勝戦は、浅葉氏対井ノ口選手。浅葉氏を破り、井ノ口選手が優勝を飾った
2. 水の卓球台で勝ち進んだ一般参加の倉田選手と浅葉氏の決勝戦。台の中央を流れる川に苦戦しつつ、ねばるカットマン・倉田選手に浅葉氏が打ち勝った



1. 今回の大会のためにデザインしたオリジナルの賞状に名前を書き入れる浅葉氏。
2. 表彰式の様子。決勝まで勝ち進んだ井ノ口選手と倉田選手には、浅葉氏から賞状が手渡された。
3. 大会参加者の集合写真。